

皆の広場

素人の歴史考④「壱岐・対馬の古代史」

自文科 永野 徹

(1)壱岐・対馬の古代史

1)壱岐古代史

1. はじめに

魏志倭人伝によると壱岐は「三千ばかりの家が有り、耕地は有るものの十分ではなく、南と北と交流している」とある。

魏使が降り立った場所は幡鉾川の流域にある原の辻遺跡辺りと思われる。原の辻遺跡は1993年の調査で、100haと言う広大な土地に朝鮮系の細形銅矛、中国のトボ玉など大陸系の遺物が大量に出土、三重の環濠を持つ城塞、葬儀場、高床式倉庫など大掛かりな建物遺構も発見された。また、日本最古の弥生中期の船着き場も発見されている。壱岐はト骨と言う中国の文化、中国製の青銅器、竿秤の重りである「権」や韓国式住居跡等の大陸系の遺跡も少なくない原の辻遺跡の北西部にあるカカミ遺跡からは朝鮮系の土器が出土している。壱岐の人々は漁業で培った航海技術を駆使して大陸との貿易で倭国の対外交渉の拠点として機能していたと見られている。壱岐は神道の島、壱岐は対馬と異なり田畑に恵まれていた。国郡制度のできた昔から壱岐と対馬は国の処遇を受けて来た。壱岐、対馬は明治4年の廃藩置県まで単なる島ではなく、一国扱いであった。戦国時代に壱岐は日高氏が支配していたが平戸の松浦氏(長崎県)に仕えた。平戸藩には上代の律令制的な土地公有の思想が有ったので私有地制度は明治に入ってからできたもの。

対馬・壱岐 対馬・壱岐は古くから単なる島ではなく、明治4年の廃藩置県まで一国として処遇されてきた。

対馬は良田が無く、漁労により自活して海上輸送で生活していた。古代(弥生式第1期)の壱岐・対馬は輸入鉄の海上輸送経路にあり元来耕地が少なく、海上輸送商い、漁業で生活していたので航海技術の基盤があり、そこに古代神道の原点として特異な要因が見られる。

古事記 古事記冒頭の国生み神話に対馬・壱岐が登場する。「次に伊伎島を生みき」「次に津島を生みき」とあり。二つの島は上代から十分認識されていた。

魏志・倭人伝

3世紀頃 「始めて一海を渡る千余里。対馬国に至る。其の大官を卑狗と曰ひ副を卑奴母離と曰ふ。居る所、絶島。方四百余里ばかり。土地は山陰しく深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田無く、海物を食って自活し、船に乗りて南北に市糶す。

鉄輸入 朝鮮半島から鉄器の伝来(5世紀まで輸入)で農耕地が飛躍的に
4～5世紀 拡大し日本の弥生式農耕が開けて倭国が成立した。

鉄の国産開始は6世紀の事と言われている。
「魏志」東夷伝(第2巻)には4～5世紀ころ倭人が南朝鮮(弁辰)まで盛んに鉄買にやってくる情景が掛れている。
また「魏志」東夷伝(第7巻弁辰)のくだりには「国(弁辰)鉄を出す。韓、濊、倭皆従って之を取る…」と記載されている。(3世紀半ば)

戦国時代 戦国時代に壱岐は日高氏が支配していたが平戸の松浦氏(長崎県)に長じた。平戸藩には上代の律令制的な土地公有の思想が有ったので私有地制度は明治に入ってからできたもの。

江戸時代 江戸幕末には小笠原壱岐守(肥前唐津藩世子)の支配下。平戸藩は全島を農村である「触れ」と漁村である「浦」に分けた。壱岐八浦と呼び八浦、一方触れの数は全島で九十九触れ壱岐は米作地で平戸藩の4割を生産し2500石高もあった。

2. 壱岐の特色

観光地点としては唐神、鬼の岩屋、国分寺跡、住吉神社、など
壱岐、対馬は明治4年の廃藩置県まで単なる島ではなく一國扱い
であった。壱岐は神道の島。

① ト占神道

ト占(太占ヲマニ):動物の骨を焼いてそのひび割れの形で吉凶を
占うもので中国ではBC17~10世紀頃殷の時代に既に行われ甲骨
文字まで用いていた。ト占は古代世界では最先端科学であり専門
の神道者がこの術を用いた。大和朝廷はわざわざ玄界灘の離れ島
から呼び寄せ宮廷の科学を担当させた。5世紀頃京都・松尾大社で
は壱岐県主押貝を呼び祭祀させていた。大宝律令(701年)制定当
時にも神祇官の職掌としてト部20人が置かれ壱岐から5人、対馬
から10人が都に呼ばれて吏員となった。

日本書紀・顯宗紀

5世紀頃 動物の骨を焼いてト占を行う習慣は漢民族にはなく北菰の殷一代
で終えた。殷では鹿の骨を焼く時甲骨文字まで使われていたにも拘
らず数百年後に日本へ入ってきたト占にはまだ文字は見られない。
骨も鹿ではなく亀などが多い。恐らく日本には北アジア遊牧民族の
習慣が移入されたものかも知れない。顯宗紀によれば阿閉臣事代
が任那に使いした時に壱岐で月詠命が取り付き我を祀れと命じら
れて都に帰った阿閉臣は、顯宗天皇に報告し歌荒櫟田に祀ったと
言う。是が京都の松尾大社であり、壱岐県主押見宿祢を呼んで祭
祀させたと言う。

竜山期鹿骨 ト占は北アジアでは新石器時代(1万年以上前)から行われていた。

(新石器時代) 北アジアの骨ト(鹿等)が3世紀頃に、その後殷の亀甲トが(6~7
世紀)日本へ。太占は中国の竜山期にはじまり2000年ほどかけて
朝鮮経由で対馬・壱岐へ流入。平安時代の延喜式(905年)の律令
時代になっても対馬・壱岐のト部は重視され中央政府の神祇官と
して採用されて中央政府の神祇官として採用されていた。(対馬10
人、壱岐5人、伊豆5人)これ等から判断すると日本神道は必ずしも
日本列島固有のものではないのかも。動物の骨を焼いて吉凶を占
うのは古代北アジア民族の一般習俗である。ト占(太占ヲマニ):動
物の骨を焼いてそのひび割れの形で吉凶を占うもので中国ではB
C17~10世紀頃殷の時代に既に行われ甲骨文字まで用いていた。
亀甲ト (中国殷) ト占は古代世界では最先端科学であり、専門の神道者がこの術を
BC1600~ 用いた。大和朝廷はわざわざ玄界灘の離れ島から呼び寄せ宮廷の
1020) 科学を担当させた。5世紀頃京都・松尾大社では壱岐県主押貝を呼
び祭祀させていた。大宝律令(701年)制定当時にも神祇官の職掌と
してト部20人が置かれ壱岐から5人、対馬から10人が都に呼ばれ
て吏員となった。鹿トは後期弥生式土器と一緒に日本の数か所か
ら出土している。日本では鹿トから亀トに移行したのは6世紀末か
ら7世紀初めころ。

天孫降臨(北アジア思想)

天と言う言葉はモンゴル後のテングリアに期限が有り「祭天の古俗」を有
していた。殷人は夷菰であるらしく天の意志を知る為に王自ら神主と
なって亀トを行った。漢字文化以前の韓国(カン)は汗(カン)=北アジア
の王カンに由来するとも言われる。古代対馬に天の思想と骨トが
伝わると天を祀ると言うこの思想により天つ神が現れ、天孫族が現
れる事になった。高天原を祖地とする神々は古事記・日本書紀に
よって天皇家の祖神群となる。

② 海の民

福岡県宗像郡玄海町の玄界灘に面した砂丘上にある鐘崎貝塚に
縄文式土器を残した鐘崎海人は海へ出かけて1年間の大半を過ごす
ことが多かったようで対馬や壱岐の海人もこうした鐘崎海人から進出
した人であると言う。さらにこの人達が海を越えて朝鮮半島に出かけ

て行ったということで鐘崎は縄文時代に既に壱岐対馬の原点であり、更に南朝鮮にも進出していたと言う。これと深く関連するものとして律令時代(767年)に宗像郡大領宗形朝臣深津がその妻竹生王と共に鐘崎船瀬を造った功で叙位に預かっているとの記録が有る。

③鉄文化

鉄遺跡

壱岐の鉄遺跡(3世紀頃:弥生後期)

弥生中期～後期の鉄遺跡として壱岐島に2つの遺跡(原の辻、唐神)がある。

原の辻遺跡では相当規模の水田耕作が行われており弥生中期層では石器(石剣・石斧・石包丁)に混じって少し鉄器が発掘され弥生後期層では石器が鉄器に変わっていた。

(鎌、鍬、手斧、鋤先、釣針等)

3. 壱岐の風土

印通寺浦

壱岐から大和朝廷へ神祇官として出仕していた壱岐古磨の子で遣新羅使の1員で雪連宅満(ユキムラジヤカマロ)が朝鮮に向かう途中、壱岐で病死したと言う歌が万葉集に残されていてその人の墓が印通寺浦にある。

唐人神

壱岐には漂流した唐人・朝鮮人を祀った古跡が数多くありその一つが唐人神。漂着神であるエビスを海の向こうから来た客人(人・死体・もの)を神として祀る風習(マヒト信仰)が有ったようである。

唐神遺跡

カカミヤキ

弥生中期から後期にかけての高地性集落跡。

S27年に調査が行われ、古代水田あとに石器(石斧・石包丁)と僅かな鉄器と中国・日本製の鏡の破片も出土した。森の植生はマテハシイと朝鮮槿

郷ノ浦

印通寺から岳ノ辻経由で郷ノ浦と続く。

白村江の戦い(663年)で唐・新羅連合軍に敗れて日本が攻められる心配がありその備えとして防人・山城・烽火台を造った。その烽火台の1つがあった場所が岳ノ辻である。この火は大宰府まで通伝され瀬戸内海から河内高安山から生駒山に飛び最後に奈良公園の飛火野に至る。百済救援の戦であったがこの敗戦で多くの百済王族・村民が日本へ逃げてきたことで多くの高度文化が移入される事となった。郷ノ浦には亀岡城があり城の北は農村部で武生水と呼び漁村部は郷ノ浦と呼ばれた。触れは(農村)、浦は(漁村)。

国分寺跡

勝本浦

俳人で松尾芭蕉の門下人である河合曾良の墓が有る(中藤家の墓地)曾良が61才の時、将軍綱吉が死去して諸国に巡検視が派遣され、西国道巡検視随員として曾良が加えられ壱岐勝浦で病んだ。巡検視随員として曾良が加えられ壱岐勝浦で病んだ。

神皇子跡(朝鮮通信使の応接跡)一勝本町教育委員会一須藤資隆

2)対馬古代史

1. はじめに

①対馬とは

地 形

「魏志」東夷伝・倭人(第2巻)で「土地は山陰しく、森林深く……良田無し」と記載されており、良田が無く海の貿易・漁師を主体とするが、生活が苦しく倭寇としての活躍が目立つ。

地理的には、北九州まで約138kmで韓国釜山まで50kmと断然韓国に近い。現在は博多から水中翼船で壱岐経由で2時間弱で対馬に至る。対馬は東西約18キロ、南北82キロで日本で6番目に大きい島で90%が森林。九州の縄文人は優秀な船乗りだったので対馬は韓国に近いが倭の領有地。出土品から見て、対馬には縄文時代に人々が移り住み早くから朝鮮半島と交流を持っていたと考えられている。

朝鮮半島 弥生時代の遺構からは朝鮮半島の金海式土器や北九州の遠賀川土器などが出土しており、対馬が北九州と朝鮮半島の中継地点になっていたと見られる。耕地面積の乏しい対馬は交易や漁業で発展していたと思われる。

白村江の戦い

663年白村江の戦いに敗れて対馬に初めて防人をおいて国家意識が生じた。

海の民 北部九州の志賀島に海の民である安曇氏の拠点が有った。弥生時代を通じて対馬の海の民は「鉄の商人」であったかも。

②対馬の歴史

古代 対馬には耕地が無く漁労により自活し海上輸送で商いをしていた。古代(弥生式第1期)の壱岐・対馬は輸入鉄の海上輸送経路にあり元来耕地が少なく、海上輸送商い、漁業で生活していたので航海技術の基盤があり、そこに古代神道の原点として特異な要因が見られる。国郡制度のできた昔から壱岐と対馬は国の処遇を受けて来た。対馬・壱岐は古くから単なる島ではなく、明治4年の廃藩置県まで一国として処遇されてきた。

古事記 古事記冒頭の国生み神話に対馬・壱岐が登場する。「次に伊伎島を生みき」「次に津島を生みき」とあり。二つの島は上代から十分認識されていた。

魏志・倭人伝

3世紀頃 「始めて一海を渡る千余里。対馬国に至る。其の大官を卑狗と曰ひ副を卑奴母離と曰ふ。居る所、絶島。方四百余里ばかり。土地は山陰しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田無く、海物を食って自活し、船に乗りて南北に市糶す。

鉄輸入 朝鮮半島から鉄器の伝来(5世紀まで輸入)で農耕地が飛躍的に
4～5世紀 拡大し日本の弥生式農耕が開けて倭国が成立した。鉄の国産開始は6世紀の事と言われている。

「魏志」東夷伝(第2巻)には4～5世紀ころ倭人が南朝鮮(弁辰)まで盛んに鉄買にやってくる情景が掛れている。また「魏志」東夷伝(第7巻弁辰)のくだりには「国(弁辰)鉄を出す。韓、濊、倭皆従って之を取る…」と記載されている。(3世紀半ば)

江戸時代 江戸幕末には小笠原壱岐守(肥前唐津藩世子)の支配下。平戸藩は全島を農村である「触れ」と漁村である「浦」に分けた。壱岐八浦と呼び八浦、一方触れの数は全島で九十九触れ。壱岐は米作地で平戸藩の4割を生産し2500石高もあった。観光地点としては唐神、鬼の岩屋、国分寺跡、住吉神社、など

明治時代 江戸幕末に安藤対馬守(奥州平藩主)がいた。壱岐、対馬は明治4年の廃藩置県まで単なる島ではなく、一国扱いであった。戦国時代に壱岐は日高氏が支配していたが平戸の松浦氏(長崎県)に献じた。平戸藩には上代の律令制的な土地公有の思想が有ったので私有地制度は明治に入ってからできたもの。昭和23年頃、季承晩大統領はこの事を捉えて対馬は韓国領と表明したことがある。

③壱岐・対馬の特色

①ト占神道

ト占(太占ヲマニ):動物の骨を焼いてそのひび割れの形で吉凶を占うもので中国ではBC17～10世紀頃殷の時代に既に行われ甲骨文字まで用いていた。ト占は古代世界では最先端科学であり、専門の神道者がこの術を用いた。大和朝廷はわざわざ玄界灘の離れ島から呼び寄せ宮廷の科学を担当させた。5世紀頃京都・松尾大社では壱岐県主押貝を呼び祭祀させていた。大宝律令(701年)制定当時にも神祇官の職掌としてト部20人が置かれ壱岐から5人、対馬から10人から5人、対馬から10人が都に呼ばれて吏員となった。

日本書紀・顯宗紀

5世紀頃 動物の骨を焼いてト占を行う習慣は漢民族にはなく、北菰の殷一代で終えた。殷では鹿の骨を焼く時甲骨文字まで使われていたにも拘らず、数百年後に日本へ入ってきたト占にはまだ文字は見られない。骨も鹿ではなく亀などが多い。恐らく日本には北アジア遊牧民族の習慣が移入されたものかも知れない。
顯宗紀によれば阿閉臣事代が任那に使いした時に壱岐で月詠命が取り付き我を祀れと命じられて都に帰った阿閉臣は顯宗天皇に報告し歌荒櫟田に祀ったと言う。是が京都の松尾大社であり、壱岐県主押見宿祢を呼んで祭祀させたと言う。

竜山期鹿骨 (新石器時代) ト占は北アジアでは新石器時代(1万年以上前)から行われていた。北アジアの骨ト(鹿等)が3世紀頃に、その後殷の亀甲トが(6~7世紀?)日本へ。太占は中国の竜山期にはじまり2000年ほどかけて

朝鮮経由で対馬・壱岐へ流入。平安時代の延喜式(905年)の律令時代になっても対馬・壱岐のト部は重視され中央政府の神祇官として採用されていた。(対馬10人、壱岐5人、伊豆5人)

これ等から判断すると日本神道は必ずしも日本列島固有のものではないのかも。動物の骨を焼いて吉凶を占うのは古代北アジア民族の一般習俗である。ト占(太占ヲマニ):動物の骨を焼いてそのひび割れの形で吉凶を占うもので中国ではBC17~10世紀

亀甲ト (中国殷) 頃殷の時代に既に行われ甲骨文字まで用いていた。ト占は古代世界では最先端科学であり、専門の神道者がこの術を用いた。
BC1600~1020) 大和朝廷はわざわざ玄界灘の離れ島から呼び寄せ宮廷の科学を担当させた。5世紀頃京都・松尾大社では壱岐県主押見を呼び祭祀させていた。大宝律令(701年)制定当時にも神祇官の職掌としてト部20人が置かれ壱岐から5人、対馬から10人が都に呼ばれて吏員となった。鹿トは後期弥生式土器と一緒に日本の数か所から出土している。日本では鹿トから亀トに移行したのは6世紀末から7世紀初めころ。

(北アジア思想)

殷人は夷菰であるらしく天の意志を知る為に王自ら神主となって亀トを行った。漢字文化以前の韓国(カン)は汗(カン)=北アジアの王カガンに由来するとも言われる。古代対馬に天の思想と骨トが伝わると天を祀ると言うこの思想により天つ神が現れ、天孫族が現れる事になった。高天原を祖地とする神々は古事記・日本書紀によって

②海の民

天皇家の祖神群となる。
福岡県宗像郡玄海町の玄界灘に面した砂丘上にある鐘崎貝塚に縄文式土器を残した鐘崎海人は海へ出かけて1年間の大半を過ごすことが多かったようで対馬や壱岐の海人もこうした鐘崎海人から進出した人であると言う。さらにこの人達が海を越えて朝鮮半島に出かけて行ったということで鐘崎は縄文時代に既に壱岐対馬の原点であり更に南朝鮮にも進出していたと言う。これと深く関連するものとして律令時代(767年)に宗像郡大領宗形朝臣深津がその妻竹

③鉄文化

生王と共に鐘崎船瀬を造った功で叙位に預かっているとの記録が有る。古代(弥生式第1期)の壱岐・対馬は輸入鉄の海上輸送経路にあり元来耕地が少なく、海上輸送商い、漁業で生活していたので航海技術の基盤があり、そこに古代神道の原点として特異な要因が見られる。朝鮮半島から鉄器の伝来(5世紀まで輸入)で農耕地が飛躍的に拡大し日本の弥生式農耕が開けて倭国が成立した。鉄の国産開始は6世紀の事とされている。

「魏志」東夷伝(第2巻)には4~5世紀ころ倭人が南朝鮮(弁辰)まで盛んに鉄買にやってくる情景が掛れている。

また「魏志」東夷伝(第7巻弁辰)のくだりには「国(弁辰)鉄を出す。韓、濊、倭皆従って之を取る…」と記載されている。(3世紀半ば)

(鉄遺跡)

壱岐の鉄遺跡(3世紀頃:弥生後期)

弥生中期～後期の鉄遺跡として壱岐島に2つの遺跡(原の辻、唐神)がある。原の辻遺跡では相当規模の水田耕作が行われており、弥生中期層では石器(石剣・石斧・石包丁)に混じって少し鉄器が発掘され、弥生後期層では石器が鉄器に変わっていた。(鎌、鍬、手斧、鋤先、釣針・・・など)

2. 対馬の風景

厳原 厳原港は万葉の頃与良の津と呼ばれ、現在は博多からのフェリーの発着場。室町時代に対馬国守護大名の宗氏がここに府中をおいた城下町であった。タクシーの運転が荒っぽいらしく、水田は無く漁村文化対馬の窓口である。漁村文化とは有り金を叩いてしまうと言う蓄えることを知らない文化をさす。いつ遭難して死ぬかもしれない漁民文化には敬語が無い。厳原の対馬交通ホテルの邸内に「志賀の荒雄のお墓」(あらおどん洞)がある。
・江戸中期対馬藩の儒者・漢学者であった雨森芳州の墓が有る。雨森芳州は伊勢へ医学を学びに行くが残念して木下順庵に儒学を学ぶ。同門に荒井白石・室鳩巢・榊原篁州がいる。朝鮮通信使の対応をした。(町立博物館)

対馬藩主

宗氏 律令時代の対馬は大宰府に属していた。在地官人として阿比留氏が治めていた。阿比留は1243年太宰少貳によって滅ぼされた。この時惟宗重尚が藩主となる。後日、惟宗が惟を除いて単に宗氏と名乗った。宗氏は鎌倉から明治まで続いた。

鶏知住吉神社

海神の鶏知住吉神社の神官は途絶えたはずの阿比留氏である。魏志倭人伝の大官卑狗も鶏知にいたかも前方後円墳が一基ある。カネ制の対馬県直(つしまかばねのあがた)が島主として鶏知に。

浅茅湾(アソウ)

対馬の浅茅湾は溺れ谷地形で日本海と浅茅湾を結ぶ運河が有れば島の両側からの寄付きが便利になるという事で一部陸送が残るが可能な部分は運河として開削した大船越と小船越と言う運河が有る。船越しとは一方の海からインクラインのように船を陸に引っ張り上げて反対側の海面に運ぶことになる。

大船越

結局、大船越(船越瀬戸)は1672年に開削したが小船越は開削しなかった浅茅湾の南半分を下県と言い、北半分を上県と言う。

小船越

他にも明治の海軍が明治33年頃開削した日露戦争対策の万関瀬戸がある。小船越には阿麻氏留神社(アマテルジンジャ)がある。祭神は天照魂アマテルミタマとか天日神アメノヒノミと呼ばれており、天照大神と同一なのかは不明。

高天原神々

対馬南端の豆酏ツツには高御産巢日神タカミミズビが祀られた神社が有る。日本書紀によると、顕宗3年日神がト部に憑りついて「磐余の田を以って、我が祖高皇産霊に献れ」との託宣が有ったとの記載が有り対馬下県直(ツシマシモツアガタアタイ)がこの神を大和に分祀したことになる。対馬ト部達が対馬の山で祭っていた「天」を象徴する神々を天皇家の祖神として吸い上げたのかも知れない。

天孫

金田城

金田城(カネタキ)は7世紀に築かれた浅茅湾を見下ろす位置にある城。白村江の戦い(663)に敗れて2年後に唐・新羅連合軍が攻撃してくる事を想定してヤマト朝廷は各地に城を築いたその一つである。対馬はヤマトにとって重要な防衛拠点であった。

わだつみ神社

海神神社 烏帽子岳展望台から浅茅湾が見降ろせるがその麓に和多都美神(対馬一宮)社がある。海神神社は西海岸の突端である木坂の御前浜にある。海神神社は海人が祀る旧国幣中社で天つ神でもなく、国つ神でもない。海洋漁労の民族が奉じて来た神で、裏山を伊豆山と言う。伊豆は万葉仮名で伊都、伊豆と標記されその意は厳伊であり、「神霊の威光」に近い意味。出雲国造神賀詞では「伊都幣の諸結び天の御影とかがふりて伊豆の真屋に荒草を伊豆の席と刈り敷きて」とある。浅茅湾の仁位にもワダツミ神社があり「和多都美神社」社伝では海神・豊玉彦命が宮殿を建てた場所で子供に穂高見命、豊玉媛命、玉依姫命がいた。ある時彦火火出見尊が釣り針を無くしこの宮にやって来て豊玉姫を娶って3年間暮らし帰ってから二柱の神を祀って和多都美神社とした。(安曇野磯良丸=磯良エビス、玉ノ井=お産場所)日本の有名な海の神は三つ存在する。
・少童命(綿津見):対馬の安曇氏が祀る。本殿手前の浜に磯良エビス(磐座)
・宗像女神(田心姫神、湍津姫命、市杵島姫神)
・住吉大神(底筒男命・中筒男命・表筒男命)

千俵蒔山

(センビョウマキ) 対馬北端の千俵蒔山まで行くと韓国(巨済島60km先)が見える。この海峡は荒波で1266年フィリピンの使者2人は冬の海を見て「風濤蹴天」と恐れをなした。

古神道

古代神社のもと(神)で、中国周時代でも樹々が神の依代であった。社では土地神をまつる。
神籬=神の降臨する山=ひは霊、もろはもり(社)
磐境=上部は細かい三角錐状の石積み(黄泉の川原石積み信仰と同じ)トウヤ=神社を護持し、祭礼を司る村社に赤米を造り神に捧げる。赤米(神聖な米)のあとジャポニカ米が栽培された(赤飯の習慣)洛東江流域任那から赤米が伝来したのではないかとされている。

(日本書紀)

海幸 古代の海族は海幸・山幸の伝承を持ち、記紀によれば山幸(弟)の「彦火火出見尊ヒコホホデミミコト」が海幸(兄)である「火欄降命ホノサリミコト」の釣り針を借りて海釣りに出かけてこれを無くして彷徨っている時に塩土老翁(シオツチノオジ:場所を教える神)に逢い海神宮に至る。
安曇・阿曇
海人・海部

古事記

「魚鱗の如造れる宮室、其れ綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木有らむ。故、その木の上に坐さば、其の海神の女、見て相議らむぞ。」

山彦がこの宮に着き、木の上に座っていると海神の娘(豊玉姫)が出迎えた。

海神神社

新羅仏

この木坂の海神神社の山上には山幸彦が祀られている。宝物館には新羅仏(銅像)が保管されている。(八世紀統一新羅時代)数少ない対馬の農地として以下が有る。他は農耕不可である。

仁田川

対馬第2の大川、良田が多い。

佐護川

対馬第1の大川、佐護は対馬一の農地。

佐護川の右岸は千俵蒔山、左岸は天道山でその先に「天神多久頭

タクブスマ神社

魂神社」(アメノタクブスマ ジンジャ)がある。

(2) 壱岐・対馬マップ

